



My Bookshelf

今月の
選者

村上祐子 (東北大学大学院理学研究科)

哲学者たちの反省

情報管理 55(7), 532-534, doi: 10.1241/johokanri.55.532 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.55.532>)

ここしばらくサンデル教授の白熱教室をきっかけに哲学ブームが起こっている。ハーバード大学での授業では教員が学生に質問を投げかけ、学生は真摯に応える。「金を積んだら入学可能な枠を作るのが正当かどうか」のような身近な公共性にまつわる倫理的問題について、学生は自分の身に引き付けて自分の言葉で回答する。このような議論のあり方に感銘を受け、日本にもこのような授業を導入しようとする人々は多く現れ、実際に東京大学で招聘講義が行われたりもした。

しかし物事はそれほど単純ではない。日本の大学にこのような授業を継続的に持ち込むのは大学の人員体制として非常に難しい^{注1)}。制度面の問題だけではない。サイエンスカフェ等で双方向の議論を仕掛けていったとしてもなかなか白熱しないし、白熱したと思ったらあっという間に脱線するにはそれなりの理由がある。そもそも日本の教育には議論の基本的なプロトコルをマスターする・させる仕組みもその前提となる複数意見の尊重の文化もない。そしてこの仕組みを設計・実装するとすれば、議論の作法をマスターしていると他の人が想定できる仕組みとしてのシグナリング機能を学歴や資格などの形で与えることが必要であるし、議論スキルと複数意見尊重の態度をもつことがインセンティブとなるような社会的合意も求められるだろう。だが日本国内の大学卒業資格は現在このような機能を果たしていないし、社会的にも大学卒業者にそのようなスキルを期待している節はない。

あえて極論すれば、「弁の立つ人は怖い」、「若者は年長者に反論すべきではない」などとして反論しないように誘導する者がいれば、パワーハラスメントおよび本人の議論スキル欠落および民主主義の担い手としての実力不足の認定という制裁が与えられてしかるべきだ。また、大学内において授業内での発言に成績への反映のようなインセンティブが与えられるとともに、その後の就職・奨学金等に大学の成績が直接影響する社会的合意ができれば、学生はやむをえず(?) 発言するようになる。しかし、単に「発言する」というだけではその質は玉石混淆であろう。立派に議論を行うにはそれなりの訓練と個別の話題に対応するための準備が必要なのだ。そのためには小人数でのきめ細かな指導が有効なのだが、その人員は日本では担保されないまま「クリティカル・シンキング」といったタイトルの授業が開講されている。

なぜ哲学は日本では社会の担い手の基礎教養とは思われないのだろうか? 象徴的なのが高等学校の倫理のアイコンともいえるギリシャ彫刻である。あたかも「哲学は遠い世界の言葉遊戯で現在のわれわれの役には立たないのだよ」と暗黙のメッセージがこめられているかのようだ。しかも哲学の一部であるにも関わらず代表しているように思われる倫理は、受験対策として哲学者の主張のごくごく短いサマリーとその年代を暗記する科目としてとらえられる。さらに教養課程崩壊以降の大学では哲学を学ぶ機会が減少しており、一見深遠ではあるが空疎な議



論をするのが哲学であるといったイメージを持ったまま社会に出ていく学生も少なくない。

一方欧米では哲学は空論のためのものではなく、民主主義的議論のスキル・テクニックのトレーニンググラウンドであるという共通認識がなされている。大学がエリートのもつと見なされていた時代には哲学専攻者だけではなくすべての大学卒業者が幾分なりともマスターすべき分野として哲学が位置付けられていた。それは現在の大衆化した大学においても少なくとも建前として謳われている。例えば現在のアメリカでもロースクールを目指す学生にはロースクール入学者適性試験に有利であるとして、哲学入門・論理学入門は事実上必須のものとなっている。現実の問題に生きるスキルを得るために哲学を学ぶことが有益であるという社会的合意がなされ、しかも社会制度に実装されているのだ。

現在の問題に対して、哲学の伝統の中で積み重ねられた議論や概念分析のツールを使って答えようとするのが哲学の本来の姿である。だから特に初級レベルでは、相手の主張に対して、その前提の吟味と前提から主張を導き出すことの正当性の吟味を行う訓練を行うとともに、自らが主張を行う際にも攻守を交代して同じ作業を行うことが要求される。このことにより、反論する際にむやみに抗弁するのではなく、建設的に議論を組み立てるにはどうしたらいいのか、学んでいくことになる。この作業の修練のためには別に哲学の名著を題材にしたり深遠な問題に取り組んだりする必要はない。特に一般教養のようにバックグラウンドが異なる受講生が想定される場合には、取り扱う問題はなんでもよくて、むしろ全員の共通の関心と呼ぶような「大学入学者選抜」などがよいトピックになりえる。そのような汎用スキルの訓練の場の例がサンデルの白熱授業である。

前置きが長くなりすぎたが、このようなとらえ方での哲学へのガイドとなる本を2冊紹介したい。

『哲学の道具箱』ジュリアン・バジニーニ、ピーター・フォスル著;長滝祥司, 廣瀬覚訳
共立出版, 2007年, 2,730円(税込)



<http://www.kyoritsu-pub.co.jp/bookdetail/9784320005730>

本著では、哲学の概念や論証や理論を分析したり操ったり見定めたりするための道具がリファレンス・ブックのような仕方で提示されている。章構成は、演繹法や帰納法を扱う第1章「論証の基本ツール」、与えられた前提に対して最良の説明を結論として得る発見の論理としてのアブダクションや、アブダクションを通して得られた説明が本当に前提を導くものなのか検証する仮説演繹のような科学研究にも用いられる方法をまとめた第2章「その他の論証ツール」、第3章「論証評価のツール」、分析哲学の理論の基本というべき第4章「概念的区別のツール」、哲学の議論の前提を吟味し再検討する第5章「ラジカルな批判のためのツール」、哲学の破壊的側面をまとめた第6章「極限のツール」となっており、いわゆる通常の哲学史的な概説書とは一線を画している。個々の項目はコンパクトにまとめられており、哲学史上の意義という観点はある程度背景に退けられている。各項目には、他の項目とのクロスリファレンスや読書案内も付されている。特に日本語版については日本語の参考書も読書案内に追加されており、とても便利である。訳語については必ずしもスタンダードではないので、他の日本語の哲学書を読む際に戸惑う

かもしれないが、原語が添付されているため、避けば何とか対応づけられるだろう。

しかしこういった本を見て、うかつに議論のプロとしての哲学者だけに着目してはいけない。異分野共同プロジェクトの場で哲学者がときに「単なるコスト」といわれがちなのは、このような哲学的ツールを無邪気に振りかざすことに一因がある。そしてことあるごとにカントやデカルトや古今東西の哲学的警句を持ち出ししたりするのも鬱陶しい。こんな状況を打破しようとする哲学者たちとそれに共鳴する人々のマニフェストを次に紹介する。

『これが応用哲学だ!』戸田山和久, 美濃正, 出口康夫編
大隅書店, 2012年, 2,520円(税込)

戸田山和久 (p.29) は哲学の問題意識・ツールをそのまま適用する「定食モデル」、既存の問題以外にもこれまでのツールで何とか処理しようとする「メニューにない料理応談モデル」と呼び、せめてツールは持ち込むけれども現場の素材を何とかしようとする「出張型残飯整理モデル」まで持ち込まないと哲学者は役に立たないと指摘する。しかし著者にはそれでも不足に見える。素材もツールも現場で共同開発していく「サバイバルキャンプ調理モデル」が求められていると思うからだ。

そこにある問題を解決する営みが哲学であり、本来は特にわざわざ応用哲学という必要はない。この本でも、狭義の哲学者ではない藤井聡が「応用哲学, 改め, 哲学」と指摘した上で「これはモノを切るためのものなんだから、たまにはモノを切るためにも、



<http://ohsumishoten.com/books02-03.html>

このナイフを使ったり、使ってもらったりしようよ!」という運動ではないと思いたい (p.103), と哲学者たちへの期待を寄せている。つまり、『これが応用哲学だ!』は「哲学」が現代の制度のなかでねじ曲がった形に進化してしまったことへの(自己)批判の書と見なすこともできる。



執筆者略歴

村上 祐子 (むらかみ ゆうこ)

東北大学大学院理学研究科准教授。Ph.D. (インディアナ大学)。国立情報学研究所特任助教授を経て2008年より現職。科学基礎論学会理事, 応用哲学会理事。論理学・哲学を出発点に, 科学と社会の間, 自然科学と人文科学の間で煩悶中。

本文の注

注1) 伊藤憲二. “『ハーバード白熱教室』の裏側: ハーバードの一般教養の授業をサンデルの講義を例にして説明してみる”. Cerebral secreta: 某科学史家の冒言録. <http://d.hatena.ne.jp/kenjiito/20100725/p1>, (accessed 2012-07-27). ハーバード大学の教養科目を支える組織体制について詳しく論じている。